

地域と多様な主体との連携

2024/2/17



群馬医療福祉大学／短期大学部

中越信一

「仁」～思いやりで未来を創る大学～

地域の課題

- 「人口減少」による「小地域の維持困難」
- 「少子・高齢化」による人口構造の変化
- 町内会・自治会組織の加入率の低下、担い手の不足
- 全世代における「単身世帯の増加」
- 居住者の多様化、ひきこもり・8050、孤立・孤独、
複雑・複合課題の増加
- 「家族・親戚での支え合いの限界」
- 「つながりを育むこと・支えられることが苦手」

日本の1日 (H28年～R4年厚生労働白書)

人口について

生まれるのは

2, 112人

亡くなるのは

4, 299人

がんでは 1,057人

心疾患では 638人

脳血管疾患では 294人

事故では 119人

工作中的事故では 2人

老衰では 492人

自殺では 60人

**人口減少数
は1日あたり
2,187人**

人口100人を見た日本

(H28年～R4年厚生労働白書)

人口について

性別 女 51.4人

男 48.6人

年齢 15歳未満 11.6人

65歳以上 29.0人

うち75歳以上 15.5人
学生は

小学生 4.9人

中学生 2.6人

高校生 2.4人

大学生・大学院生 2.3人

保育所に入所しているのは？

2.1人

障害者は？

9.2人

生活保護受給者は？

1.6人

介護サービスを受けているのは？

4.2人



地域共生社会の理念

全ての人が地域、暮らし、生きがいを共に創り、高め合うことができる「地域共生社会」を実現する。このため、支え手側と受け手側に分かれるのではなく、地域のあらゆる住民が役割を持ち、支え合いながら、自分らしく活躍できる地域コミュニティを育成し、福祉などの地域の公的サービスと協働して助け合いながら暮らすことのできる仕組みを構築する。

「ニッポン一億総活躍プラン」



つながる

つながるとは

地域の暮らしの中で、問題・課題を抱えている高齢者、障害者、子育て中の母・父・児童等への支援は、公的、私的、市民活動など様々な形で行われる。

しかし、多様な支援があるにも関わらず、つながることが遅れたり、深刻な状況になってしまったり、時には生命にかかわる事態に陥ることもある。



なぜ、つながらないのか？
つながりにくいから？

なぜつながらないのか

背景

「迷惑をかけてはいけない」と躰けられ、育った。

「人助けは進んでするように」と教育されたが、困ったときには「助けてもらって自分を守る」という術を学ぶ機会が少なかったのでは。

結果

自分が困っても、「助けて！」と言えない！

また、「助けて！」の「適度」がわからず、頼り過ぎてしまい、相手が引いてしまうことも！

支えられ上手になるためには、「助けて！」と言える理解が必要。

「助けてもらって自分を守る」という術を学ぶ。



つながるとは

つながる力がない

支援が必要な方からの視点

- ・ 支援が必要な高齢者、障害者、子育て中の母・父、児童等は、言葉によって表現することが必ずしも得意ではない。
- ・ 我慢する。
- ・ 支援の手続きが難しい。
- ・ サービスの表示や内容が分からない。 など

つながる気持ちになれない

- ・ サービス利用に伴う嫌な体験。
- ・ 利用者と担い手の理解の不十分。
- ・ 支えられた体験がないことへのためらい。
- ・ 迷っているうちに、時期を逃した・遅れた。 など



つながるとは

支援者の視点

つながる力はあっても使えない・届かない

- ・ 支援者が当事者の話を聞く力がない。
- ・ 支援者が当事者の話を聞くという気持ちを持っていない。
- ・ 時には聞くポーズやたらいまわしも。
- ・ つながる場所や人がいない。
- ・ つながる情報がない。
- ・ 研修の必要性。 など



これらの状況に対し支援者や支援組織はどのように対応するのか

高齢者のインターネット利用率（令和3年度）
 総務省「2021（令和3）年『通信利用動向調査報告書世帯編』統計表一覧」

	合計	男	女
60～64歳	89.1%	90.5%	87.8%
65～69歳	80.0%	82.6%	77.5%
70～79歳	59.4%	65.8%	53.9%
80歳以上	27.6%	37.5%	21.9%
(参考) 65歳以上でまとめてみた利用率	53.4%	62.1%	46.7%
(参考) 75歳以上でまとめてみた利用率	36.0%	45.8%	29.5%
(参考) 国民全体の利用率	82.9%	86.3%	79.8%

連携とは

共有化された目的を持つ複数の人及び機関（非専門職も含む）が、単独では解決できない課題に対して、主体的に協力関係を構築し、目的達成に向けて取り組む相互関係の過程

吉池毅志、栄セツコ「保健医療福祉領域における「連携」の基本的概念整理精神保健福祉実践における「連携」に着目して
桃山学院大学総合研究所紀要代34巻第3号、PP. 109-122 2009年3月



連携のプロセス

- ① 単独解決できない課題の確認
- ② 課題を共有しあえる他者の確認
- ③ 協力の打診
- ④ 目的の確認と目的の一致
- ⑤ 役割と責任の確認
- ⑥ 情報の共有
- ⑦ 連続的な協力関係の展開

吉池毅志、栄セツコ「保健医療福祉領域における「連携」の基本的概念整理精神保健福祉実践における「連携」に着目して
桃山学院大学総合研究所紀要代34巻第3号、 PP. 109-122 2009年3月

連携と協働の関係

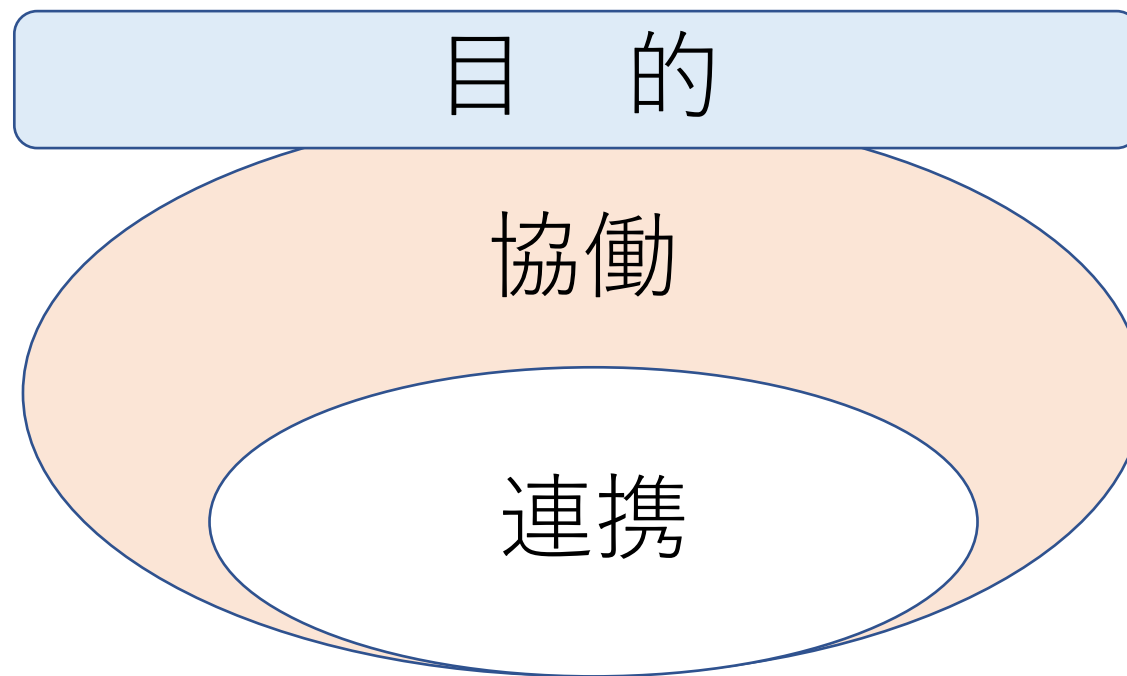
協働は同じ目的を持つ複数の人及び機関が協力関係を構築して目的達成に取り組むことを協働という。

協働を実現するための過程を含む手段的概念が連携である。

「連携」 人→多職種連携

「協働」 機関→多機関協働

※日常的には「連携」という言葉は「協働」の意味を含んで用いられることも多い



※重層的支援体制構築推進人材養成研修広報啓発事業配付資料
2023.10より

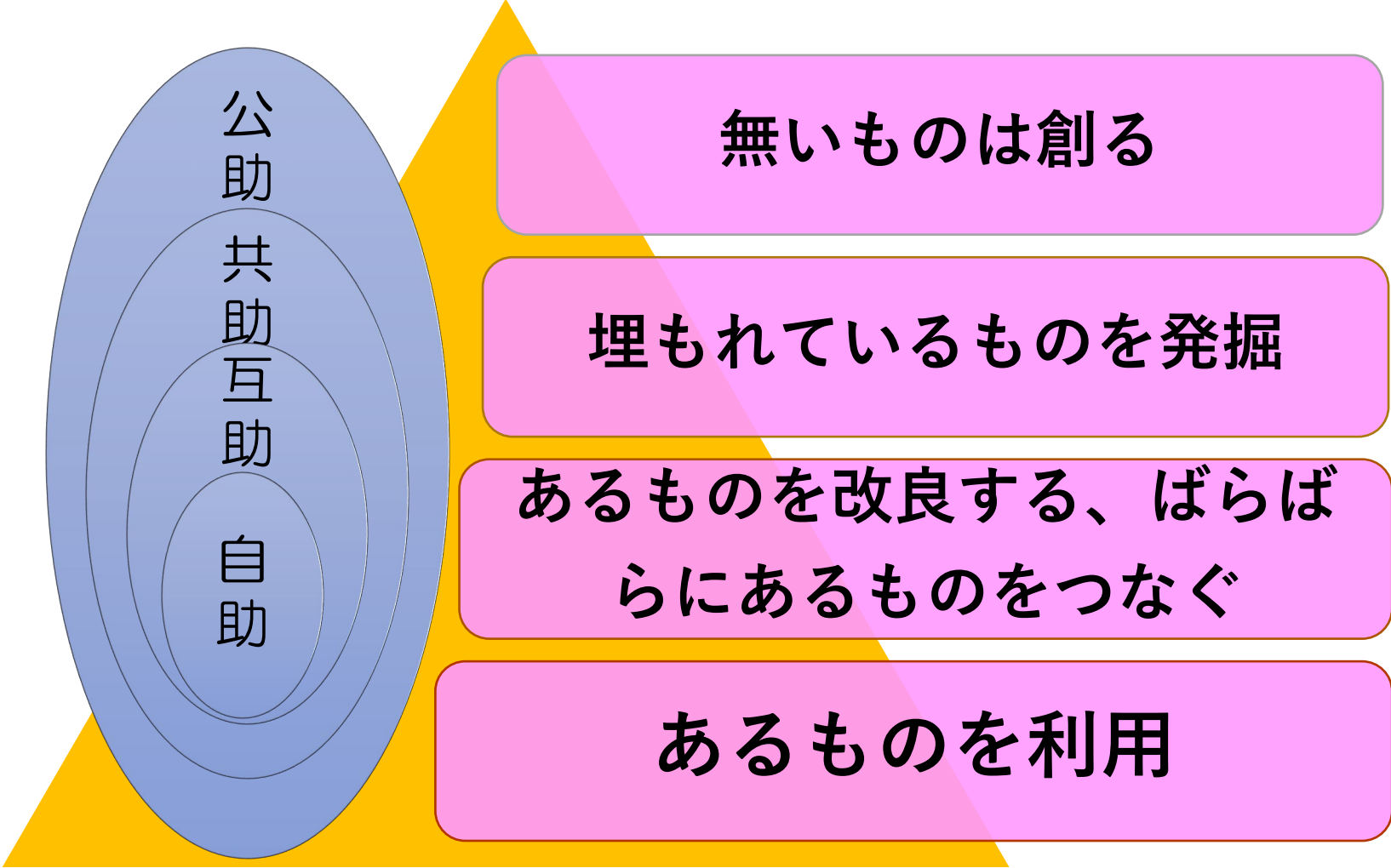
連携・協働を進めるための伝えかたのポイント①

- ① 言ったからといって、聞いてもらえたわけではない
- ② 聞いてもらえたからといって、聴いてもらえたわけではない
- ③ 聴いてもらえたからといって、理解してもらえたわけではない
- ④ 理解してもらえたからといって、賛成してもらえたわけではない
- ⑤ 賛成してもらえたからといって、共感し、納得し、行動したいと思ってもらえたわけではない

連携・協働を進めるための伝えかたのポイント②

- ① 広報しても読まない人はいる。説明しても聴いていない人はいる。聴いても理解していない人もいる。
- ② そして、これらは、読まない人、聴かない人、理解しない人の問題だけではなく、広報した人、説明した人の問題かも。
- ③ 伝え方は少しずつよくなったのかもしれない。表現の工夫が足りなかったのかもしれない。でも本当に足りなかったのは「回数」かもしれない。

連携・協働による地域資源の活用と開発



連携・協働による地域力を高めるためには

- テーマや対象を限定しないエリア型の活動も必要
- 顔の見える関係での課題の発見
- 柔軟な対応、緊急対応
- 休めないような活動はしない
- 無いと暮らせないような活動はしない
- 近所だからこそ気を使ってしまうこともある
- 活動の報酬は、やりがい、楽しさ、良い仲間、専門職やキーパーソンとのつながり、情報
- 主体性がカギ、指示されるとやりたくなくなることも
- 80歳台も現役、70歳台も若い人のイメージに



お互い様宣言 2001年, 前世田谷ボランティア協会理事長 牟田悌三

丘の上から眺めると、人びとはみんな同じに見える
丘をおりて人びとの間を歩くと、みんな違う顔をしている
心の中も違うんだ
その違いを感じ合ったり、認め合ったりするのが
人間の面白さじゃないか
お互い他人(ひと)の出来ないことをする
或るときはあげたり、或るときはもらったり
そんな信頼出来るお互いになるのが、昔からあるお互いさま
そんな社会をめざすのが、ボランティアじゃないの
「またまた、いいんだって お互いさまじゃん」